

[020]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2244153>

出版情報 : 九州人類学会報. 20, 1992-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

序 文

九州人類学会長 丸 山 孝 一

九州人類学会は、毎年1冊の会報を発行し、本号で通算20号となる。人間で言えば、やっと成人という年数であるが、この間における関係者の入れ替わりは著しい。その性格上、会員は九州在住者が中心をなすのは当然としても、巻末の会員名簿で明らかなように、その居住地は全国各地にわたっている。遠方居住の会員の多くは、かつて九州に住んでおられたか特別の縁のあった方々が多いが、遠方に引っ越しされた後も退会せずに、会員としての活動を継続して下さることは嬉しいことである。また、編集方針も、短い論文を数多く載せるという方法から、少数であるが舌足らずにならない程度に充実するように、という方向へ変わった。

本号では、そのような方針のもとに優れた原稿が寄せられた。いずれも現地調査に基づいた論考で、本会の例会において口頭発表されたものに加筆されたものである。口頭発表の原稿を文字化することは、二番煎じと言うより、限られた聴衆からより多くの、未来を含めた読者へのメッセージを伝達するという全く違った意味を持つことになる。記録という意味もちろんある。従って、著者（発表者）にとっても、文字化することによって、一層の責任と慎重さを要求されるのは言うまでもない。

文化人類学や民俗学の基礎的方法として、古来、優れたエスノグラフィーが要求されている。民族誌学とも呼ばれるこの方法は、独立した研究領域と言うより、全てのフィールドワーカーに要求される基本的方法論であろうと思われる。ところが優れた民族誌は、それなりの方法論ないし視点がなければ書くことが出来ない。記録ということの重みがそこにある。

九州人類学研究会では、この1年間、多様な人々の出入りがあつたし、近い将来にも、さらに多くの動きが予想されている。それは単に転勤のみでなく、渡り鳥のように毎年現地調査に出かける人びとを含む。本誌読者の活動もまた、「記録」に値するものが多いはずである。本誌または例会に反映されんことを。